三重県尾鷲市方言のアクセントにおける式のふるまいについて

平田　秀（東京大学大学院）

筆者が 2010 年以降行った現地調査によれば、三重県尾鷲市方言のアクセントは以下の(1)(2)でとらえられる体系である。

(1) 下げ核を持つ。下げ核とは、標準語や現代京都市方言と同じく、次の拍を下げる働きを持つ。以下「核」と表記する。

(2) α式（上昇式）、β式（早上がり式）、γ式（平進式）の 3 式を持つ。

α式 : 文節は低く始まる。核のある場合、核のある拍で上昇する。無核の場合、文節の末尾拍で上昇する。

β式 : 文節は低く始まる。核のある場合、核のある拍の左の拍で上昇する。

γ式 : 以下に述べる複雑な音調の交替がみられる。

(2)で述べた 3 式は、以下の(3)(4)に示す通り、「γ式は『始まりが高いか低いか』といった特徴を持たない」、「β式は核に従属して存在する式である」という点で、日本語諸方言にみられる式の典型からはずれる特徴を持つ。

(3) γ式は、始まりが高いか低いかの特徴を持たず、アクセント文脈によって異なった現れ方を示す。

γ式は、単独形の場合高く始まる。

「糸」（γ式・無核）: [イト ／ 「野郎」（γ式・２拍目に下げ核）: [ヤロ]ー

ただし、「α式かつ無核型の文節に後続する」と「γ式を持つ文節がその文節内で下降を実現する必要がない」を両方満たす場合のみ、γ式の文節の直前の拍を上昇させた上で、γ式の文節は低く始まる。

「この」（α式・無核）＋「糸」（γ式・無核）: コ[ノ]イト

「この」（α式・無核）＋「兜」（γ式・３拍目に核）: コ[ノ]カブト

「この糸」の場合、「糸」が無核であり、そもそも下降を実現する必要がないため、コ[ノ]イト　となる。「この兜」の場合は、「兜」は有核であるが、語末拍に核があるため、「兜」の部分で下降を実現する必要がない。このため、コ[ノ]カブト　となる。

また、「α式かつ無核型の文節に後続」し、「γ式を持つ文節が有核で、その文節内で核による下降を実現する必要がある」場合は、γ式の文節の直前の拍を上昇させた上で、γ式の文節は高く始まる。

「この」（α式・無核）＋「野郎」（γ式・２拍目に核）: コ[ノヤロ]ー

「この」（α式・無核）＋「兜が」（文節全体でγ式・３拍目に核）: コ[ノカブト]ガ

「この野郎」は「野郎」の語中拍に核があるため、下降を常に実現しなければならないため、コ[ノヤロ]ー　となる。「この兜が」は、先にみた「この兜」の場合と異なり、助詞の「-が」が付いたことにより「兜」の語末拍の核による下降を実現しなければならなくなったため、コ[ノカブト]ガ　となる。

以上に述べた通り、尾鷲式方言のγ式は、日本語諸方言にみられる式の持つ典型的特徴である「始まりが高いか低いか」の特徴を持たない、特殊な式と言える。

(4) β式は、核に従属する性質を持つ。

現時点では、「β式かつ無核の語」は見つかっていない。一般に式は核とは独立してレキシコンの中に情報が入っているものであるが、尾鷲市方言に関しては、現時点ではβ式は核に従属して存在する式であると解釈できる。

以上に述べた通り、尾鷲市方言の３式は、記述が複雑で、かつ日本語諸方言の式の典型からはずれる音韻的特徴を持つ。しかしながら、(3)で示したある種のアクセントを持つ文節どうしの連結によるトーンサンディととらえられる現象は、昇り核など拍が担う各種の核で解釈しうるものではなく、尾鷲市方言に文節全体が担うものである式を立てる必要があることを示す。この特殊なγ式のふるまいは、直前の拍を高くするという点で pre-accenting の枠組みでとらえられうるものである。